

第1回



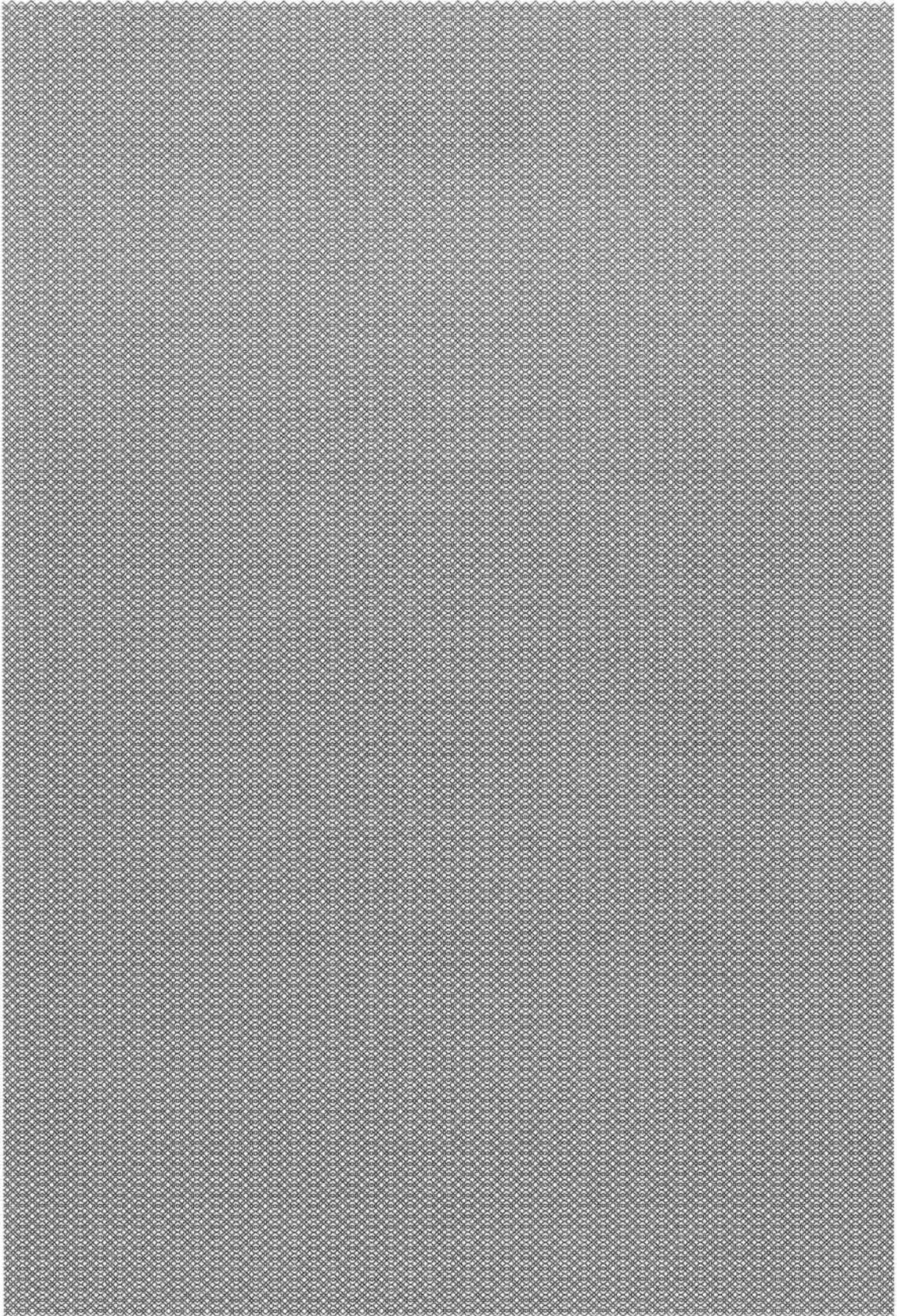
令和8年度

国 語

注 意

1. 指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 受験番号は、算用数字で分かりやすくはっきりと書きなさい。
氏名にはふりがなを忘れないこと。
4. 私語、用具類の貸し借りは禁止します。
5. 試験終了後も指示があるまで席をはなれてはいけません。
6. 質問があるときは、静かに手をあげなさい。
7. 解答用紙のみ提出しなさい。問題用紙は持ち帰りなさい。
問題用紙の余白は下書きに利用してかまいません。
8. 文字は濃くていねいに大きく書きなさい。消しゴムを使ったあとは余計な点や線などの消し残しがないかよく確認した上で書きなさい。

受験番号				ふりがな	
				氏名	



一

次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1 選手団の旗手を務める。
- 2 率直な意見を求められる。
- 3 金銭の貸借を禁止する。
- 4 燃料の払底に頭を悩ます。
- 5 若さゆえの過ち。

二

次の――線部のカタカナを漢字で答えなさい。

- 1 タンチョウな作業に飽きる。
- 2 眞贋しんがんのシキベツが困難だ。
- 3 トラブルのチュウサイに入る。
- 4 広くシントウした考え方。
- 5 環境の破壊をアヤぶむ。

次の言葉は、本来の意味とは違う意味で用いられやすい言葉です。言葉とその言葉がもつ本来の意味の組み合わせの中で、正しい組み合わせをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1

ア 更迭こうたく (意味) 悪事を働いたり失敗をしたりしたため左遷させんすること。

イ 割愛かつあい (意味) 重要でないものを省略すること。

ウ 失笑 (意味) 思わず吹き出してしまうこと。

エ 潮時 (意味) 不意だが辞める時期。

オ 召還 (意味) 人を呼び出すこと。

2

ア 役不足 (意味) 本人の力量に対して、与えられた役目が軽いこと。

イ 破天荒 (意味) 型破りで大胆な様子。

ウ 知恵熱 (意味) 頭の使い過ぎで出た発熱。

エ 他力本願 (意味) 人任せにして努力をしないこと。

オ 天地無用 (意味) 上下を気にしないでいい状態。

3

ア いやがうえにも

(意味) 無理矢理にでも。

イ おもむろに

(意味) 不意に。唐突に。急いで。

ウ あわや

(意味) あと少しで、良い事が起こりそうであるさま。

エ やおら

(意味) ゆっくりと事を行うさま。

オ いそいそ

(意味) せわしない様子。

4

ア 煮え湯を飲まされる

(意味) 敵からひどい目を受ける。

イ 遺憾いひかんに思う

(意味) 申し訳ないと思う。

ウ 琴線ことづなに触れる

(意味) 怒りを買う。

エ 手をこまねく

(意味) 準備をして待ちかまえる。

オ 流れなみに棹さしさす

(意味) 傾向に乗じて、勢いをつける。

5

ア 雨後のたけのこ

(意味) 成長が早い様子。

イ 檄げきを飛ばす

(意味) 同意を求める。

ウ 枯れ木も山のにぎわい

(意味) 人を多く集めればにぎやかになる。

エ 情けは人のためならず

(意味) 情けをかけるのは、その人のためにならない。

オ 気が置けない

(意味) 気配りや遠慮をする必要がある。

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

父への誕生日プレゼントは、結局、腕時計にした。

長年愛用していたものが最近壊れ、修理するには隣の時計屋まで持っていかなければならぬらしい。

古いものだし、父も買い換えることを考えていると言っていた。

① だから、僕は腕時計を買った。

何ヶ月もお小遣いを貯めてもデパートのショーケースに並んでいる高価なものにはとても手が届かなくて、隅っここの棚に詰めて置かれているセール品の中から一番父に似合いそうなものを選んだ。

もしかしたらそれは、大人からしたら安物のおもちゃみたいなものだったのかもしれない。

でも十一歳の僕にとっては、人生で一番大きな買い物だった。

レジでお金を払うときには、妙に緊張して手が震えた。

しかしラッピングしてもらった品物を受け取ったときには、そのドキドキはワクワクへと変わっていた。②

これを見たら、お父さんはどんな顔をするだろう。

喜んでくれるだろうか。

気に入ってくれるだろうか。

そんなことを想像しながら、僕はそのプレゼントを大切に抱え、浮き足立って帰路を急いだ。

③ 父は誕生日だからだろうか、いつもより早く帰ってきた。

僕はわざと今日が何の日か気づいていないふりをしながら、共に夕食を囲んだ。

いつもどおり言葉少なく X で食事を口へと運ぶ父だったが、よく見ると心なしか普段より少しそわそわしているようにも見える。

だから僕は、予定より早い、隠し持っていたプレゼントを父に渡すことにした。

大きくなる鼓動を抑えつつ、膝の上に出したその小包をいよいよ父の前に披露しようとする。

しかしその直前、父は突然改まった口調で僕の名を呼んだ。

「知哉ともや」

僕はテーブルの上に出しかけていたプレゼントを慌てて隠し、「何？」と聞き返す。

すると父は箸を置き、妙に真剣な表情で僕を見つめると、口を開いた。

「お前に、話したいことがある」

【省略部分のあらすじ】

この後、父から衝撃の事実が告げられ、僕はプレゼントを窓の外に投げ捨て、父とほとんど会話を交わさなまま、母の元へ引き取られていった。

あれから五年。

僕は母と新しい父の元で、幸せに暮らしている。

父の言っていたとおり、母の再婚相手は優しい人で、僕を本当の息子のようにかわいがってくれた。

それでも、僕は今でも時々思い出す。

本当はもう父と呼んではいけない父のことを。

元気でやっているだろうか。

結婚して、新しい家族ができているだろうか。

幸せでいるだろうか。

会いたいと思つたことは、数え切れない。

でも、それはきつともうできないことなのだろう。

だから、せめてあのととき、プレゼントを渡せばよかった。

最後にたつた一言だけでいいから、「ありがとう」と伝えればよかった。

今でもその後悔は消えず、僕の心に感傷を残していた。

そんなある日のことだった。

僕の元に、結婚披露宴の招待状が届いた。

新郎は向こうで暮らししていたころ、近所に住んでいたお兄ちゃん、僕もよく友達と一緒に遊んでもらったことを覚えている。

懐かしく思つた僕は、旧友から「久しぶりに会わないか」と連絡を貰ったこともあり、披露宴に出席してもいいか、思い切つて

両親に相談してみた。

新郎一家とはご近所付き合ひをしていたので、^⑤あの人も招待されている可能性があり、会つてしまうかもしれない、ということも含めて。

この家族で暮らし始めたばかりのころ、母は僕が心の中で父と呼ぶあの人のことを話題に出さないようにしていたし、会いにくくことも禁じていた。

その理由は理解していたつもりだったが、だから今回も反対されるだろうと思つていたが、案外両親はあっさりと許可してくれた。

「行っておいで」

⑥ この五年間で確かに父になつてくれたその人は、優しくそう言った。

「子どものころは知哉に早くこの環境に慣れてほしくていろいろと制限してしまつたが、君ももう高校生だ。ある程度は、自分で考えて行動してくれて構わないよ」

僕は今の家族を、大切に思う。

いろいろあつたけれど、自分は幸せだと感じた。

それでも、もし会えるならもう一度会いたい。

そんな期待を、どうしても消すことはできなかった。

会場には、懐かしい顔がいくつも並んでいた。

五年ぶりの再会に「久しぶり」「元氣だったか？」と声を掛けてくれる友人たちに言葉を返しながらも、僕はつい父の姿を探してしまう。

招待されたという確認は取つていなかった。

そもそも招待されていたとしても、用事があつて来ていないかもしれないし、もしかしたら僕が出席すると聞いて来るのを止めた可能性だつてある。

だけど、なんとなくいる気がして会場内を探し回ると、後ろのほうに一人で佇たなずんでいるところを見つけた。

あまり変わつていないその姿に安心しながらも、僕は近づき、緊張を隠して声を掛ける。

「池内さん」

父は僕が来ることを知らなかったらしく、僕を見るとずいぶんと驚いた顔をした。

「知哉、来てたのか」

「うん。久しぶり」

僕が笑ってそう言うと、父も少し笑って「久しぶりだな」と返した。

そしてそれから、僕たちはそれぞれの近況について尋ね合った。

僕は新しい家族と幸せに暮らしていることを短く話した。

父に対しては新しい家族はできたのか尋ねたが、残念ながら「仕事が忙しくて、そういう浮いた話はない」らしい。

五年ぶりだったのに、言葉を交わす僕たちの間に気まずい空気が流れることはなく、お互いに言葉に詰まるようなこともなかった。

それは悪いことではないし、想像していたとおりであったのだけれど、僕には少し寂しく感じた。^⑦

あのころとは違うのだと、ひしひしと感じたから。

僕たちはもうあのころには戻れない。

父との関係は、終わってしまった過去でしかないのだ。

懐かしむだけの、少し切ない思い出。

それはなくなることはないけれど、きっとこの先の僕の人生に大きく関わることもない。

そんなこと、もうとづくに分かっていたんだけど、それでもやっぱり寂しいと思ってしまう。

だからせめて、^⑧この感傷は捨てないことにした。

「知哉」

ちよほど会話に一区切りが付いたころだった。少し離れた場所から、友人が僕を呼んだ。

「行ってやれ」

父に言われ、僕は「うん」とうなずく。

本当に話したいことは何一つ話せていないままだったが、それでいいと思った。

もう僕たちはあのころとは違うのに、今の僕がその話をするのは何か違うように感じたからだ。

話せなかったことは話せなかったこのまま、五年前で止まってしまった思い出とともに、心の中にとっておこう。

「じゃあ、元気でね」

僕はそう言うと、笑って小さく手を振った。

「ああ、お前も」

父も少し手を上げて答えると、僕より先に背を向け、歩き出す。

しかし僕はその瞬間、急に体が固まってしまい、そこから動くことができなかった。

ほんの一瞬だったが、確かに見えてしまったからだ。

手を上げたときに覗いた袖下^{そでもと}、そこには、見覚えのある腕時計があった。

間違いない。

あれは、五年前、僕が父の誕生日プレゼントに買ったものだ。

どうしてあれを、父が持っているのだろう。

捨てたはずなのに。渡せなかったはずなのに。

どうして今でも、身に着けているのだろう。

安物なのに、五年も経てば電池が切れてしまったことだってあっただろうに。

どうして……？

そんなの、今となってはあまりに分かりきっていた。

あのとき、父が僕に言った言葉は本心ではなかったということだ。

父は五年前、すっかり里心が付いてしまっていた僕を引き剥がすために、わざと突き放すようなことを言ったのだ。僕が新しい家族と心置きなく過ごせるように、思ってもいないようなことを言っ僕に嫌われようとしたのだ。

当時は子どもだったからそんな父の優しさに気づけなかった。でも本当は、あのころだってちゃんと分かっていたこともある。

父は確かに、僕を愛してくれていたこと。

それは子ども心にも、しっかりと伝わっていた。

だから僕は、離れてからもあの人を父だと思うことをやめられなかった。

血が繋がっていなくても、戸籍上では何の関係もなくても、何年も会っていなくても、僕にとってあの方は家族だった。

そして、今でも……。

僕は一步、足を踏み出した。

いつの間にか溢れ出していた涙で、視界が歪む。

それでも足を止めず、その背中を追いかけた。

渡せなくても、届いていたプレゼント。

それは僕の代わりに、離れていた間、父との時間を刻んでくれていたのかもしれない。

「Y
！」

そのとき、止まっていた時間が再び動き出した気がした。

(吉野葵 『渡せなかったプレゼント』より)

問一——線部①「だから、僕は腕時計を買った」とありますが、この時の「僕」の心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 父のために買った腕時計は、所詮は安価なものにすぎないと卑屈になっている。

イ 貯めていたお小遣いをはたいても父に似合うような高価なものを買えず、情けなく思っている。

ウ 父への誕生日プレゼントとしてデパートで一人で買い物をし、得意になっている。

エ 貯金で購入できるものが腕時計しかなかったので、喜んでくれるか不安に思っている。

オ 父は腕時計の買い換えを考えていたので、これなら気兼ねなく受け取ってもらえると自負している。

問二——線部②「そのドキドキはワクワクへと変わっていた」とありますが、この時の「僕」の心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」にとっては高価な物を買う興奮と、それを受け取ったときに父がどのような反応をするか早く知りたいという期待。

イ 質素なプレゼントに父が落胆しないかという心配と、どんな反応でも良いから早く父に渡してしまいたいという焦燥。

ウ 自分ひとりではじめて買い物をする事による緊張と、それがうまくできたことでまた何か買ってみたいという願望。

エ こんなに質素な物を渡して父に叱られるのではないかという不安と、それでも父は喜んでくれるはずだという確信。

オ プレゼントによって父がどれほど喜んでくれるかという期待と、お礼にどんなお返しができるだろうかという高揚。

問三 ――線部③「僕はわざと今日が何の日か気づいていないふりをしながら」とありますが、「僕」がこのようなしたのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 安物の腕時計なので喜ばれる自信がなく、父にプレゼントを渡すことをためらっているから。
- イ 貯金をはたいて大きな買い物をした緊張を父に悟られないように、あえて普通になっているから。
- ウ 父が自分の選んだプレゼントを喜んでくれると確信し、安心して気が大きくなっているから。
- エ 誕生日を忘れていると父に思わせてから、突然のプレゼントを渡すことで喜びを大きくしたいから。
- オ 父が腕時計を買い換える意志が本当にあるか、食事中にしっかりと見極めようと思っているから。

問四

X

に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 泣きつ面
- イ 憂い顔
- ウ 仏頂面
- エ したり顔
- オ 赤ら顔

問五 — 線部④「よく見ると心なしか普段より少しそわそわしているようにも見える」とありますが、このときの「僕」と父の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 父が誕生日を迎え一つ歳を重ねることに落ち着かない気持ちでいると「僕」は考えていたが、父は誕生日であることを忘れていて「僕」のいつもと違う様子を見て理解に苦しんでいる。

イ 父が誕生日を祝ってもらえるか期待と不安が入り混じった思いでいると「僕」は考えていたが、父はこれから「僕」に必要なことを伝えなければならず、そのためのタイミングを計りかねている。

ウ 父が自分と一緒に誕生日を迎えることがうれしくてしかたない気持ちでいると「僕」は考えていたが、父は「僕」がプレゼントを用意してくれているのか不安に思っている。

エ 父が自分の誕生日に浮かれてしまっていることを隠そうとしていると「僕」は考えていたが、父は自分の誕生日に「僕」に重要なことを伝えなければならないことへのいらだちを隠せないでいる。

オ 父が自分からのプレゼントが何であるかを期待しているだろうと「僕」は考えていたが、父は毎年の「僕」からのプレゼントにうんざりしていることを隠そうとしている。

問六 — 線部⑤「あの人」とは誰のことを表していますか。本文中より十六字で抜き出して答えなさい。

問七 — 線部⑥「この五年間で確かに父になってくれたその人」とありますが、この人は「僕」にどのように接してきたと考えられますか。本文中より二十字で抜き出して答えなさい。

問八 — 線部⑦「僕には少し寂しく感じた」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 時間が経ち成長した「僕」は、池内さんとの当たり障りのない会話から五年前とは違う距離感を覚えたから。

イ よどみなくすらすらと言葉を投げかけてくる池内さんの様子から、「僕」は池内さんのことを理解していなかったとわかったから。

ウ 「僕」は成長したのに、目の前にいる池内さんは「僕」の記憶する五年前の姿と変わっておらず、隔たりに気づいたから。エ 相変わらず忙しい生活を送る池内さんなのに、「僕」は新しい家族と幸せに暮らしていることに引け目を感じたから。

オ 「僕」は池内さんとまた生活したいと思っっているのに、池内さんにはそのような様子はなく、気持ちのすれ違いが生じたから。

問九 — 線部⑧ 「この感傷は捨てないことにした」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どものころ父と過ごした思い出は、成長した「僕」にとって今では自分を形作る大事な要素になっているので、そのまま胸にしまつて今の自分を大切にしたいということ。

イ 子どものころ父と過ごした思い出は、成長した「僕」にとって今ではしんみりと味わうことができるものなので、新たに昔の悲しさを晴らすような真似をする必要はないということ。

ウ 子どものころ父と過ごした思い出は、成長した「僕」にとってこれからの人生に影響はしないものの、父と昔の関係に戻れない寂しさを紛らわしたいということ。

エ 子どものころ父と過ごした思い出は、成長した「僕」にとって単なる過去のことではしかないものの、父との別れの時に感じていた悲しさと心の傷は何をしても拭い去れないということ。

オ 子どものころ父と過ごした思い出は、成長した「僕」にとって過去のことと折り合いをつけたものの、割り切ったゆえの心の痛みは受け入れたいということ。

問十

Y に当てはまる言葉を本文中から四字で抜き出して答えなさい。

問十一 本文の中に出てくる腕時計の効果について中学一年生が自由に話し合っている場面です。本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

A：プレゼントとして用意した腕時計を、「僕」は窓の外に投げ捨ててしまったんだよね。やっぱり悔しかったのかな。貯金したお金で買ったのに受け取ってもらえなかったんだから。

B：父のために購入した腕時計が父の手から一瞬見えた時、「僕」はどんな思いだったのかな。懐かしさもあつただろうし、大人には合わない安物の腕時計を贈ってしまったことを恥ずかしくも思ったのかな。

C：腕時計に気付いた時、「僕」は父の真意に気付くことができたんじゃないかな、「僕」のために父は本心とは異なる行動をとっていたことに。

D：でも父も素直じゃないよね。「僕」のことを愛しているのなら、言葉にして伝えればいいのに。捨てられていた腕時計をわざわざ着用して気付かせようとするなんて。

E：「僕」と別れることを受け入れた時、父は辛かったと思うよ。だから「僕」からのプレゼントである腕時計を「僕」の分身のように大切に使っていたんじゃないかな。

F：腕時計が壊れていたことを知り、誕生日プレゼントとして贈ってくれた「僕」の優しさは本当に嬉しかったと思うんだよね。だから感謝の気持ちを伝えるために、わざわざ披露宴につけていったんだよ。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ヒトは進化の結果、コミュニティによる助け合いの精神と家族愛にあふれた生きものになりました。しかし近代化の流れの中でコミュニティは弱体化し、個人は孤立して、ネット社会という新しいフィールドでスマホ片手に画面を撫^なで、目の前の世界には

X というのが、現代のヒトの姿です。

この状況は、ライフスタイルだけというと、大型霊長類のオランウータンに少し似ています。オランウータンはマレー語で「森のヒト」という意味です。彼らはグループを作らず、単独で暮らしています。食べる量が多いので、集団で暮らすより、一人暮らしのほうが都合が良かったようです。

また、高い木の上で常に暮らしているため、天敵もおらず、感染症などのリスクも低いという利点もあります。なんだか最近の私たちに似ていますね。さすがにマスクはしていませんが。オランウータンのメスは少産で、7年くらいに一度しか子供を産みません。その分、母子の絆は強く、乳離れも遅いです。一頭のメスは生涯4〜5頭の子供を産みます。ちなみにオスは子育てに参加せず、単独で暮らすので生涯孤独です。個体数は最近100年で80%減少したと言われています。近い将来、野生のオランウータンはいなくなる可能性が高いです。700万年前に森を捨てた「平地のヒト（私たちのこと）」の開発のせいで、スマトラなどの生息地で森が減少しているためです。

B 私たち「平地のヒト」は、森だけでなく自分たちの生活空間や社会も改変し、自ら住みづらい世の中を作っているようにも見えます。それで最近、さらなる新天地として「平地」から「サイバー空間」に移動し始めました。ここでは肉体からも解放され、一見なんでもできる快適さや豊富な快樂があります。ただ、不毛^①です。というのも、快樂は本来、本能行動を助長し「幸せ」に結びつけるものです。サイバー空間で得られる承認や興味を掻き立てるゴシップ記事は、時間を忘れさせ、死からの距離感も大きくなる錯覚に陥ります。それはそれで結構だとは思いますが、サイバー空間はリアルではないので、お腹が膨れるわけではなく、や

り過ぎるとかえって死からの距離は縮まります。体あつての「幸せ」なのです。

加えて世界中には、貧困や災害・紛争などで衣食住にも困っているヒトが11億人いると推定されています。AIやサイバー空間の維持に使う膨大な電力は、今後さらに大気中の二酸化炭素濃度を増やし、気候変動を介して食糧生産を低下させる可能性があります。これは待ったなしで対策が急がれます。

ヒトの未来を希望あるものにするとしたら、私は二つの方法しかないと思っています。一つは自然帰帰です。理想的には1万年くらい前の生活に戻ることですが、そこまでではなくても、自然がヒトのさまざまな営みを許容できるところまで開発を抑える、あるいは自然に負荷をかけない形に戻すことです。ヒトの進化の歴史では、旅をしながら、その場その場での自然の恵みを享受してきました。自然を変えなくても、自分たちが移動することで食料を得ることができたのです。そしてヒトの足跡は、自然がうまく具合に消してくれていました。

農耕を始めた定住生活は、集団を豊かにし、人口も増やしました。同時に自分たちの住環境を都合のいいように変えてきました。特に先進国の人口密集地帯は顕著です。現実問題として、先進国では自然帰帰は手遅れのように思います。私たちはすでにそれができないくらい自然をいじってしまいました。地球規模で見ても、自然の恵みだけでは80億人は支えきれないように思います。

ちょっと想像すると、原始の生活は不便なことばかりで、現代人から見れば幸せとは程遠いようにも思えます。それは「幸せ」の価値観が違うからです。原始までのヒトの最大の「幸せ」は日々生きること、食べるものがあること、一緒に行動する信頼できる仲間がいることでした。それらが直球で死からの距離を遠ざけていたのです。大変わかりやすいですね。【あ】

翻って現代人を見てみましょう。食べ物があり、住む家もあり、多くのヒトにとって、近日常に死ぬ可能性はほぼゼロに近いと思います。SNSなどネット経由で多くの人もつながっています。死からの距離はかなり遠そうです。前章で述べたように、だからといって「あー、幸せ」と日々幸せを感じているわけではないですね。本来は生物学的にはかなり「幸せ」なはずなのですが、物質的な豊かさに幸せをあまり感じない一つの理由は、死からの距離を測りにくくなっていることもあると思います。③原始の人

がタイムトリップして現代に来たら、同じような感覚になるかもしれません。最初は、食べ物豊富にあるし安全で、なんて「幸せ」な世界だろうと思うかもしれませんが。そのうちに、なぜかあまり幸せではなくなってくると思います。

たとえば、「何を目標に生きていいのかわからない」「情熱が湧かない」「いいことが起こる予感がしない」「毎日理由もなく忙しい」「将来にワクワク感がない」「適度に楽しいので家族を作ろうとは思わない」などなど。生きている喜びや感動、新しい命や生活に対する希望が、どんどん少なくなっていくのです。

前章でお話ししたように、現代人は精神的な意味で死からの距離感が広がってはいけません。私たちは本能にも助けられて、いろんなことに挑戦し、ベターなものを作り出すことで、死からの精神的な距離を保ってきました。ところがテクノロジーに支えられた「便利さ」が、死からの距離を見えなくし、同時に「幸せ」も感じにくくしています。生きていることが当たり前になりすぎてしまっているのです。実際に、豊かなはずの先進国ほど自殺が多く、その数は増加傾向です。物質的な豊かさ、便利さは必ずしも「幸せ」とは限らない、どちらかという逆ですね。【い】

自然回帰に加えて、人類の滅亡を防ぎ未来を作るもう一つの方法は、矛盾しているように聞こえますがテクノロジー（科学技術）の活用です。テクノロジーは先にお話ししたように、現在では精神的にマイナスの面もあり、自然にも負荷をかけています。④
④
で身体的には「便利な生活」の立役者であり、生産性を向上させ、健康を維持し、死からの距離をかなり広げてきました。要は使い方次第なのです。【う】

人類は、直立二足歩行をするようになると、頭部が胴体の上に乗っすぐ乗っかり、大きな頭を支えられるようになりました。そして、大きくなった大脳が作り出す「好奇心と知能」によって新天地の探索や自然の探究を進めてきました。狩猟採集の時代から、自然を知ることが生きるために必須なことでした。そういう探究心あふれるヒトが生き残ってこられたのです。これも人類の進化の過程で遺伝子に刻まれた性質です。ヒトは赤ちゃんのときから、他のどの動物よりも好奇心が旺盛です。【え】

定住後は、生活に余裕ができた分、好奇心をよりテクノロジーに傾けました。最初は狩猟採集の道具から始まり、農具、乗り物、

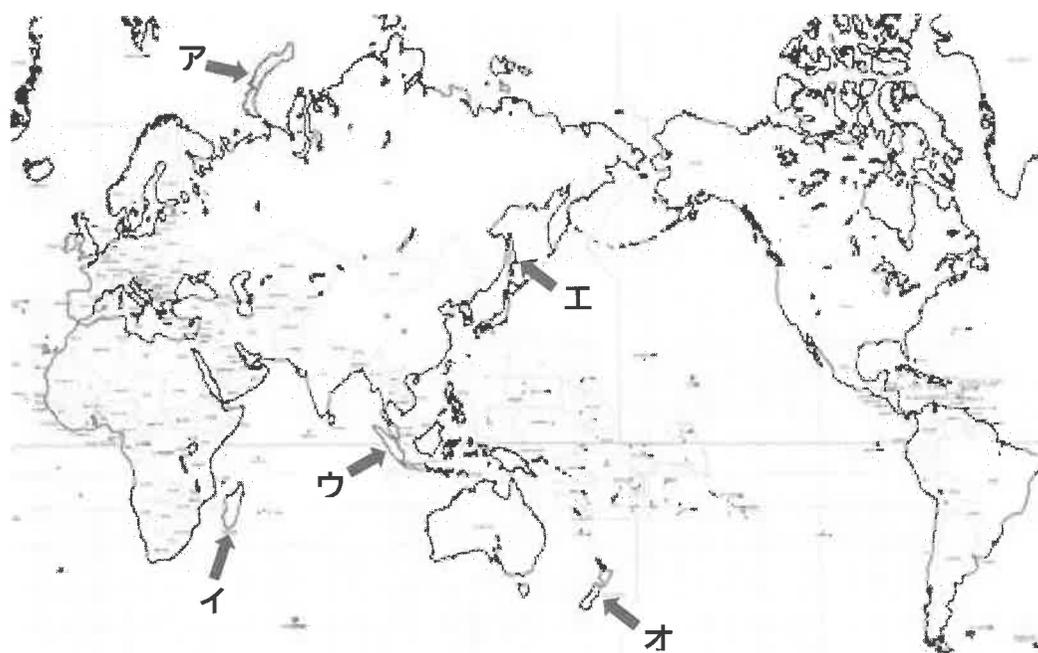
住居などを次々に開発しました。自然探究についても、星の観察や動物や草木の生態など、人類の好奇心をさらに掻き立てるような発見をしてきました。「えーっ、こうなつてたんだ！」という発見に伴う感動と、その発見までの過程で味わうワクワクドキドキ感、時間を忘れさせます。技術の開発もそうです。何か新しいものを作っているときには、時間を忘れて没頭してしまいます。つまり、死からの距離が遠く感じるのです。【お】

さらに近代・現代になると、エネルギー革命が起こり、それまで人力と馬力が主だったのに対し、水力、風力、火力、原子力などから、自分たちの力の何万倍、何十万倍ものエネルギーを取り出すことに成功しました。その結果、大きなものを動かしたり、大きなものを作ったり、高速で遠くに移動したりとなんでもできるようになりました。作れるもののレベルの次元が格段に上がったのです。挙げ句の果てには月旅行まで達成してしまい、「人類の夢」の一つ、宇宙探索は現実味を帯びてきています。ちなみに鉄腕アトムは原子力で十万馬力。

ただこのような強力なテクノロジーは、使い方を間違うと大変危険です。前にもお話ししましたが、ヒトは本能的に新しいものを作り出し、それをありがたがって使いますが、その使い方までは遺伝子に刻まれています。作り出したものに当初の目的以外の使い方があったり、想定以上の危険性があつたとしても、理性的にコントロールできないのです。それどころか創意工夫して、いろんな使い方を一生懸命考えてしまいます。要するに、「おもちゃ」で遊んでしまうのです。また、一度作ったものを、これは危険だからといって捨てるということもしません。これらの性質のおかげで、さまざまなテクノロジーがバージョンアップし続けるという利点がある一方で、核兵器まで作ってしまいました。それを使えば人類は滅亡するのに、持ち続けるのです。不思議ですが真実です。⑤テクノロジーは進歩しても、ヒトはあまり進歩していません。

(小林武彦『なぜヒトだけが幸せになれないのか』より)

問一 野生のオランウータンが生息している場所はどこですか。その場所を次の地図から選び、記号で答えなさい。



問二 Xには、「ほかのことに気をとられていて、今必要なことに注意が向かないこと」という意味を表す三字(漢字かな交じり)の慣用句が入ります。適切な慣用句を考え、ひらがな五字で答えなさい。

問三 ——線部①「不毛です」とありますが、筆者がこのように言うのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア サイバー空間は、ヒトにとって過ごしやすい空間ではあるが、そこで得られるものは社会ではまったく役に立たないから。
- イ サイバー空間は、ヒトの本質的な欲求を満たすことができるため、現実世界での生きる目的を見失わせてしまうから。
- ウ サイバー空間は、ヒトが作り出した理想的な空間であり、そこで生活する限り資源やエネルギーを全く消費しないから。
- エ サイバー空間は、ヒトに物質的な充足感をもたらすことがなく、それに没入することで心身を損なう可能性があるから。
- オ サイバー空間は、ヒトが万能の存在であると勘違いさせ、実際の生活の中で不便や苦痛を強く感じさせてしまうから。

問四 ——線部②『幸せ』とありますが、ここでいう「幸せ」とはどういう状態を表していますか。本文中の言葉を用いて十五字以内で答えなさい。

問五 — 線部③ 「原始の人がタイムトリップして現代に来たら、同じような感覚になるかもしれませんが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 極度に改変の進んだ社会の中では、自然との共生で命を繋ぐことができないから。
- イ 環境の激変した現代では、生きることへの喜びを見出すことができないから。
- ウ 安全を前提とした社会では、身体的な危険を察知することができないから。
- エ 個人の価値を重視する現代では、誰とも繋がりを築くことができないから。
- オ 命の危険を感じるものがめつたに無い環境では、生きることができないから。

問六 — 線部④ 「自然にも負荷をかけています」とありますが、テクノロジーが自然に負荷をかけ人間の生活を脅かす具体例を、本文中から一文で探し、始めの五字を抜き出しなさい。

問七 ——線部⑤「テクノロジーは進歩しても、ヒトはあまり進歩していないのです」とはどういうことを表していますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ヒトは直立二足歩行をして以来、旺盛な好奇心によりテクノロジーを進歩させ、快適な生活を送ってきた。好奇心を満たすことはヒトの「幸せ」そのものだが、自らを滅ぼす可能性があるテクノロジーを排除することができないということ。

イ ヒトの好奇心は他の動物よりも強く、それゆえに自らの生活空間を宇宙にまで広げようとしている。これを可能にしてきたのはテクノロジーの進歩であるが、ヒトが何に「幸せ」を感じるかは狩猟採集の時代から変わっていないということ。

ウ テクノロジーの発展はヒトの本能によってもたらされ、それは同時にヒトの生活の質の向上に大きく貢献してきた。生活の質の向上は「幸せ」に直結してきたが、「幸せ」にかわる価値を発見しなければ、これ以上のテクノロジーの発展は望めないということ。

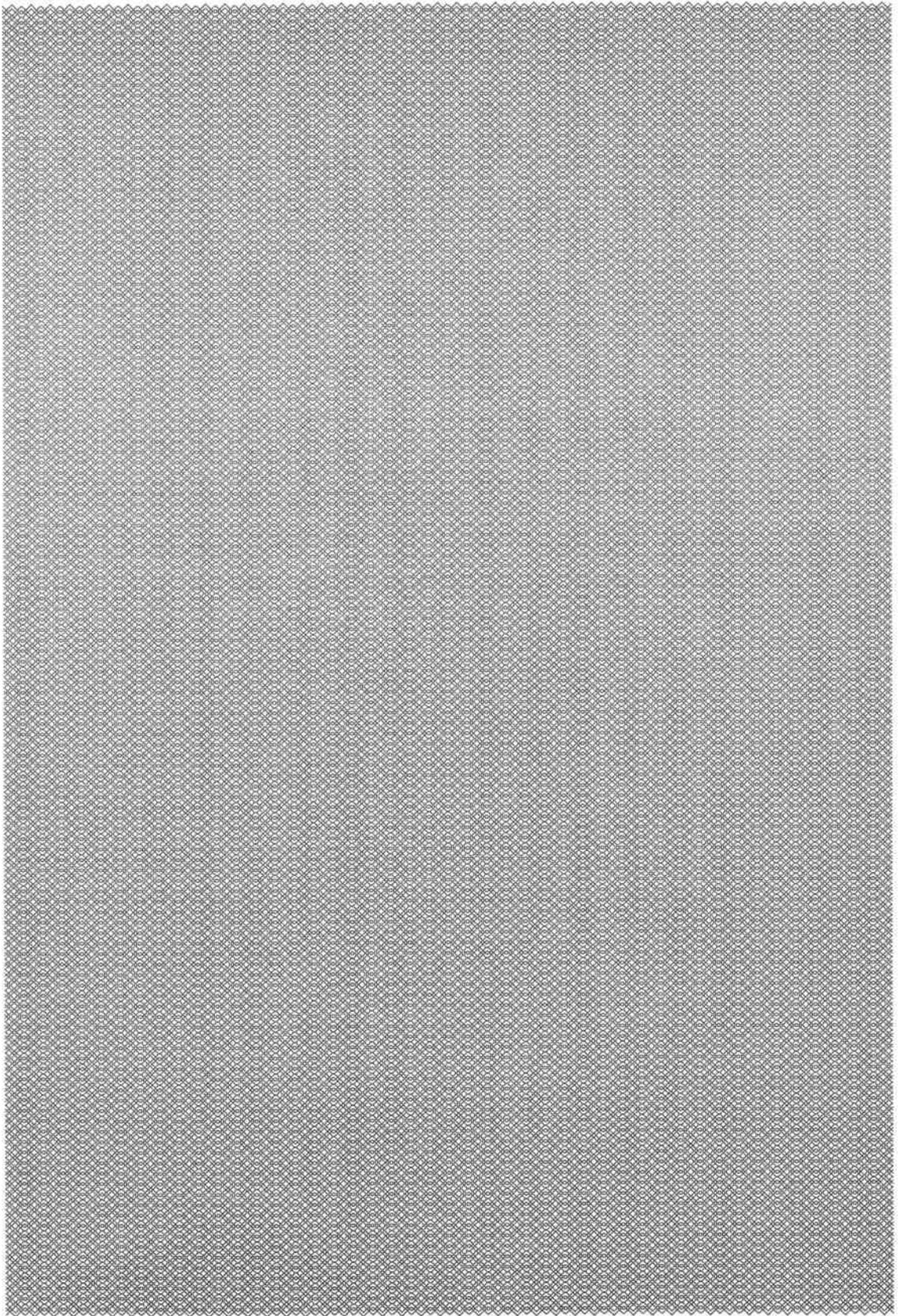
エ ヒトは狩猟採集の時代からさまざまな道具を開発し、生産性の向上を目指してきた。道具はヒトの好奇心により、進歩を重ねてきたが、ヒトは古くなった道具を捨てないため、自ら作り出したものにより圧迫され、自分たちの生活空間を守れないということ。

オ テクノロジーの進歩はヒトの生活を飛躍的に発展させてきた。しかしテクノロジーは後天的なものであり、ヒトの生存そのものに必須なものではないため、正しい使用法を遺伝子レベルで身につけなければならないということ。

問八 本文からは次の一文が脱落しています。この一文を補うのに適当な箇所を、本文中の【あ】～【お】の中から選び、記号で答えなさい。

ヒトはなぜ科学をするのかというと、ズバリそれが「幸せ」だからです。

問九 〓線部B「平地のヒト」という表現は人間のことを表しています。〓線部A「森のヒト」と称されているオランウータンと比較することで筆者はどのようなことを読者に伝えようとしていると考えられますか。オランウータンとの共通点に注目し、本文全体を踏まえ八十字以内で答えなさい（句読点・符号も一字とします）。



令和八年度第一回入学試験《国語》解答用紙

受験番号	
氏名	ふりがな

一

1	2	3	4	5	ち

一

二

1	2	3	4	5	ぶ ち

二

三

1	2	3	4	5	

三

四

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

四

五

問一

問二

問三

問八

問九

問十

問十一

・

問四

問五

問六

問七

問八

五

問九